

■スライド1

川崎市岡本太郎美術館の佐藤と申します。本日はお招きいただきまして、ありがとうございます。私どもの美術館は、ちょっと紹介をさせていただきますと、生前の岡本太郎氏から川崎市に寄贈された作品をもとに、1999年に開館した個人美術館です。岡本の作品は常設展で常にご覧いただけるようになっておりますが、あわせて岡本と関わりのあるテーマや作家をあつかった企画展を継続して行っております。

■スライド2

これまで当館では、岡本太郎と同時代に交流の深かった作家のグループ展や、今日お話しする北代省三や池田龍雄といった作家の回顧展も行っています。本日は、北代省三と池田龍雄が、それぞれ中心的に関わったグループである、「実験工房」と「制作者懇談会」をご紹介します。

大阪の「具体」とほぼ同時期に東京で活動したグループですが、1950年代のアヴァンギャルド芸術運動の中でも、なかなかユニークな特色を持ったグループだと思いますので、結成の経緯、それから活動内容のごくかいつまんだ概要、そしてそれが東京の芸術運動の中でどのような流れにあったかということをお話していきたいと思います。

■スライド3

1 実験工房

実験工房のメンバーの集合写真です。「実験工房」は、美術だけでなく、音楽、評論などメンバーの専門が多岐に渡ることや、活動の公式的な記録がほとんど残されていないため、なかなか実態が掴みにくいグループとされています。2013年に、鎌倉の近代美術館を皮切りに、「実験工房」展が全国5会場を巡回し、また同じ時期にニューヨークの近代美術館でも「Tokyo」展という形で焦点が当てられるなど、近年だいたい再評価が進んできたと思われま。

この写真は、メンバーである、ピアニストの園田高弘がヨーロッパから帰ってきたときに、園田夫妻と瀧口修造をかこんで撮影されたもので、エンジニアの山崎英夫をのぞけば、実験工房のメンバー全員が揃っています。

■スライド4

まず「実験工房」のメンバーの構成をご覧いただいたのですが、お手元の資料の方にもメンバーの名前を書いてございますので、あわせてご覧ください。向かって左手のグループは、どちらかというところでは視覚芸術、美術や写真といった造型のメンバーです。右手の方は作曲家、ピアニスト、音楽評論といった音楽の側のメンバーとなります。ちょっと独特なのは、照明やエンジニアといった技術的な部分を担当するメンバーが含まれるということでしょうか。音楽史の側から見ても、世界的な作曲家・武満徹の揺籃期として「実験工房」は位置づけられています。

活動時期は1951年から1957年ですが、結成時の宣言とか、あるいは解散宣言もなくでですね、グループ全体の活動が収束した後も、それぞれのメンバー同士の共同作業というのはずっと続いています。

■スライド5

「実験工房」というグループの名前を命名したのは、シュルレアリスムの詩人で美術評論家の瀧口修造であることはよく知られていますが、じつは瀧口はメンバーではなく、彼らの「精神的な支柱」であり、相

談役、顧問、ゴッドファーザーみたいな言い方をメンバーの方が伝えてますけれども、そういう存在だったようです。

武満徹はのちに瀧口を回想する座談会で、「まったく指導しない。プログラムに短い文章を書いてくれたりとか、個々に作家とふれあってはいたけれども、『実験工房』自体の運動に具体的な方向性を与えたりすることはまったくなかった」（宇佐見圭司、大岡信、武満徹、松浦寿夫「前衛とはなにか 瀧口修造と戦後芸術」『へるめす』第5号、1985年12月）と述べています。また瀧口自身も1962年に針生一郎と対談したなかで「実験工房といえばちょっと大仰に聞こえるし、これは僕が名前をつけたので、責任もあるのですが、実際は自然にできたグループで「音楽の人たちと、造形美術の人たちとが期せずして理解し合える友達であったということ」ですと述べています。

また、瀧口以外にも、グループの理解者・支援者としては岡本太郎、海藤日出男という存在があります。岡本太郎もグループ結成以前から、造形・音楽のメンバーともに交流があり、発表会のときには駆けつけ、新聞や雑誌に好意的な評をたびたび寄せています。また海藤日出男は、読売新聞の文化部の記者なのですが、瀧口に美術批評を依頼したり、読売アンデパンダンをはじめたりと、1950年代60年代の日本の前衛芸術運動を、メディアの側から仕掛けていった人物で、瀧口や岡本と非常に近い存在でした。また、画家の齋藤義重もグループのよき理解者だったと、のちに山口は述べています。

■スライド6

ここから実験工房が結成にいたる経緯を見ていきたいと思います。これは1948年に東京・お茶の水の文化学院で行われた、日本アヴァンギャルド美術家クラブが主催した「モダンアート夏期講習会」での記念写真です。

造型の中心メンバーである北代省三、福島秀子、山口勝弘が初めて顔を合わせ、また、講師として来ていた岡本太郎や阿部展也に出会うのも、この講習会の場でした。なお、日本アヴァンギャルド美術家クラブには具体の吉原治良も参加しているんですけども、この時の講習会には来ていなかったようです。

■スライド7

講習会終了後、北代が呼びかけ、参加者同士の研究会がはじまります。この写真は、その研究会が行った「七耀会」展という展覧会の会場風景です。パンフレットには、岡本太郎も文章を寄せていますが、この時の出品作は、北代、山口、福島の三人とも抽象絵画、今ご覧頂いているような作品で、あわせて北代は、瀧口が雑誌で紹介したカルダールのモビールの写真で模作を作るんですけども、それを会場に展示しています。

福島はこの文化学院で美術部にいましたけれども、北代は機械工学が専門で、シンガポールへ従軍した後、復員して、それから美術への関心を持つという経歴ですし、山口勝弘の専門は法学・法律学と、美術とは門外漢のところにいる人たちで、彼らはみな専門的な美術教育を受けてはいません。この講習会がほぼスタートラインと言って良いわけです。

彼らは、この後岡本太郎に誘われて「アヴァンギャルド芸術研究会」や「世紀」といった芸術運動にも参加をし、翌年からは読売アンデパンダン展などへの出品を行い、特に北代は、読売アンデパンダンの出品作が新聞で批評が大きく取り上げられたことから、一気に前衛美術の舞台へと躍り出るかたちになります。読売新聞の取材で瀧口修造が北代の自宅を訪れたのをきっかけに、瀧口との交流もはじまっていきます。

■スライド8

一方、音楽のほうの交友関係ですけれども、作曲家の福島和夫は画家の福島秀子の弟なんですね。合唱のサークルで作曲家を志す鈴木博義や武満徹と知り合って、福島の実家や、日比谷にあるCIEライブラリーによく集まっていたそうです。

CIEライブラリーは、GHQの民間情報教育局が設置した図書館で、海外の図書雑誌、レコードや楽譜も置いてあり、毎週レコードコンサートが行われていました。美術のほうも、山口勝弘がここに毎日のように通い、モホイ・ナジの『ヴィジョン・イン・モーション』を読んだりしていたようです。実験工房のなかでも、とくに山口と北代は、バウハウスのモホイ・ナジの、光と運動による造形とか、アートとテクノロジーの融合、といった方向性に大きく影響を受けているのではないかと思います。

1950年にですね、福島秀子と一緒にこのCIEライブラリーを訪れた作曲家たちが、たまたま山口勝弘に出会ったところから、美術の側と音楽の側が合流して、福島の実家やCIEライブラリーで頻りに会合もたれるようになります。作曲家たちもまた、専門教育を受けている人はいなくて、個人的に清瀬保二などの作曲家の門をたたいて学ぶような形なんですからけれども、武満徹の作曲家としてのデビューとなる1950年10月の「新作曲派協会発表会」では、美術のメンバーだけでなく、瀧口修造、北代省三、山口勝弘、そして岡本太郎も来場しています。そして、武満の曲に感激した秋山邦晴と湯浅譲二が楽屋を訪ね、グループの主要メンバーがほぼ顔を揃えるということになります。

■スライド9

横山はるひバレエ公演 「失樂園」1950年、「河童」1951年

瀧口修造「バレエ装置に新機軸」『読売新聞』1950年10月1日

造形メンバーのほうでは、1950年、51年に、北代省三が横山はるひバレエ公演の舞台装置とポスターを手がけています。この公演は芥川也寸志が作曲しているんですけども、芥川の妻である画家の芥川紗織を通じて、駆け出しの抽象画家であった北代に、美術一切を依頼するという経緯だったようです。ともに照明は、芸術運動「世紀」でも面識があった今井直次で、実験工房で照明と一緒にやることになるメンバーなんですけれども、こうした仕事が「実験工房」結成への踏み石となっていきます。

■スライド10

「北代省三起草 アトム第1回展（仮称）」

これはお手元の資料の裏に、ちょっと小さい図版なんですけれども、載せておきますのでご覧いただけたらと思うんですが、ちょうどそのグループが研究会を重ねて、1951年の夏頃にはグループを何か結成しようという機運が高まっていくんですね。そのときに起草されたものなんですけれども、メンバー全員の合意を得たものではなく、北代省三が個人的に書き出した展覧会の草案という形で残されているものです。主旨を見ますと、「芸術の諸種の分野を統合して在来の展覧会形式に見られなかった、異質の芸術相互の有機的統合を見だし、より生活に結びついた社会性のある、新しい芸術形式の発展のために努力する、一つの試金石として本展覧会を開催する。」とあり、当初は展覧会形式での発表を北代が考えていたことがわかります。また、出品内容には「絵画、オブジェ、バレエ 舞台装置、音楽、詩」があげられており、この時すでに「実験工房」の活動の方向性が明確に出ていることがわかります。

グループの名称を北代は「アトム」と提案したのですが、全員の賛同を得られず、ピカソ祭のイベントを請け負う際に、瀧口によって「実験工房」と名付けられることになります。

■スライド11

「ピカソ祭 バレエ「生きる喜び」1951年11月16日／日比谷公会堂」

ここから、実験工房の主な活動を簡単にご紹介していきたいと思います。

後に第一回発表会と記される、「ピカソ祭 バレエ「生きる喜び」」の写真です。

1951年11月に日本橋高島屋にて読売新聞社主催の「ピカソ」展が開催され、その関連行事である「ピカソ祭」でのイベントについて、読売の海藤日出男から瀧口に相談があり、このグループのことを推薦した瀧口を経由する形で、グループにバレエ公演の委嘱の話が持ち込まれます。イベントを請け負うなら名前が必要ということで、瀧口の命名で「実験工房」という名前が決まることになります。「ピカソ祭」は一日限りのイベントで、バレエ「生きる喜び」のほか、講演や詩の朗読、映画の上映なども行われました。

■スライド12

具体的に工房のメンバーが何をやったのかというのが、パンフレットに書いてあるんですけども、瀧口がプログラムに寄せたテキストには、「「実験工房」はみな20代の若い世代による日本には珍しい総合的芸術集団であること」と、「台本、作曲、装置衣装、照明、演出すべてがスタッフ各分野の緊密な協同制作で実現した」と記されています。

後に、秋山邦晴は、制作期間は1か月少々しかなく、非常におおわらわでの準備だったと回想していますが、舞踏家や振付家への依頼にはじまり、シナリオ、作曲、舞台美術、衣装、照明まで、実験工房のメンバーが担当し、楽器の演奏と振付け、ダンサーの部分は違いますけれども、それ以外は全てメンバーが担当したという形になるようです。武満の曲はメシアンやサティ的な要素もみられる斬新なオーケストラ曲であり、照明は緻密で微細なグラデーションをもった色彩が変幻するすばらしい光のパフォーマンスだった、と回想していますが、残念ながら白黒写真しか残っていないので、どういう効果の照明だったかというのは文章から推測するしかありません。

残念ながらこういう実験工房の公式的な映像記録はほとんど残っておりません。

■スライド13

「実験工房第2回発表会 現代作品演奏会」1951年1月20日／女子学院講堂

つづいて行われた第二回発表会は、コンサート形式によるものとなります。海外の最新動向として欧米の現代音楽を紹介するというので、秋山邦晴がオリビエ・メシアンに直接コンタクトをとるなど、海外との交流もみられました。ポスターとプログラムは北代省三によるデザイン、モビールを舞台に吊るして、照明を演出するといった視覚的な効果も狙っていたそうです。

■スライド14

「実験工房第3回発表会」1952年2月1日～10日／タケミヤ画廊

「実験工房作品展・絵画彫刻写真」1955年11月28日～12月3日／村松画廊

第3回発表会は展覧会形式での発表となります。タケミヤ画廊で行われたのですが、造形の各メンバーの作品が出品されて、瀧口が命名した山口勝弘の《ヴィトリヌ》シリーズの一番最初の作品のほか、北代のモビールオブジェ、福島油彩、照明の今井直次が制作した舞台装置模型も出品されたようですが、詳しい目録や会場風景は残っていません。

展覧会形式でのグループの発表は、この他に1955年「実験工房作品展・絵画彫刻写真」、この2回だけですが、工房の活動と並行して、美術のメンバーはそれぞれに個展やグループ展などで発表を続けています。55年の展覧会では、山口はガラス絵、北代は写真版画、大辻は「抽象とリアルの組み写真」、福島は水彩作品を出品したことが、植村鷹千代の新聞評で確認できます。

■スライド15

「実験工房第4回発表会 園田高弘渡欧記念 現代作品演奏会」1952年8月9日／女子学院講堂

第4回発表会、こちらでもコンサート形式になります。エリック・サティやメシアンの曲の紹介のほか、工房のメンバーの武満、湯浅の曲も初演され、舞台には北代のスタビルが置かれ、照明は「ほとんど自然光に近い、やわらかな強弱」で演出がなされたという証言が残っています。

■スライド16

APN 『アサヒグラフ』コラム 1953年1月～1954年2月連載

オブジェ制作／北代省三、山口勝弘、駒井哲郎、齋藤義重、勅使河原蒼風、長谷川三郎、浜田浜雄 撮影／大辻清司

こちらは実験工房の公式の活動というわけではないんですけれども、『アサヒグラフ』に掲載されたシリーズで、『アサヒグラフ』編集長（伊沢紀／飯沢匡）から北代省三が相談を受けて発案したコラムで、造形作家がオブジェを制作し、それを写真家の大辻清司が撮影してコラムのタイトルカットとして使ったシリーズです。工房のメンバーの他、齋藤義重、勅使河原蒼風なども参加していて、オブジェと写真のコラボレーションとして、1953年1月から翌年2月まで全55回交代で行われたという形になります。写真家の大辻がこれをきっかけに「実験工房」に参加することになります。

■スライド17

「実験工房第5回発表会」1953年9月30日／第一生命ホール

「第5回発表会」もコンサート形式ですが、音楽メンバーの新曲の発表とともに、テープレコーダーによる詩の朗読、そして東京通信工業（現在のソニー）が作っていたスライドとテープレコーダーの音源が同期できるオートスライドという機材がありまして、そのオートスライドで作られた作品を4本上映しています。造形メンバーと音楽メンバーでそれぞれ組んで4本の作品が作られていますので、非常に「実験工房」らしい発表会だったといえると思います。こちらは1986年にポンピドゥーセンターで「前衛芸術の日本 1910-1970」展が開催されたのですが、そのときに残っていたフィルムが復元され、現在ではオリジナルと少し違いますけれども見ることができます。

■スライド18

「バレエ実験劇場」1955年3月29日～31日／俳優座劇場

1955年に開催された「バレエ実験劇場」は三日間の公演で、構成演出を川路明、振り付けを松尾明美が手がけています。松尾明美は先ほどお話にありましたデモクラートに参加をされていた方ですね。写真は、北代省三の大きな機械仕掛けの装置の模型ですけども「未来のイブ」という作品です。ほかに山口勝弘がモールガラスを使った「イルミネーション」、福島秀子の絵画を使用した「乞食王子」の3作品が上演されました。照明は今井直次、音楽は黛敏郎とともに武満も参加しています。非常に前衛的なバレエで、松尾明美の回想によれば「バレエ好きな人は全く来なくて、前衛芸術の人ばかりが見に来た」とのことでした。

松尾明美が「デモクラート美術家協会」に参加をしていたときに、1953年に「旋律」という作品を発表して（1953年、帝国劇場）、そのときは加藤正が舞台装置、襲嘔が照明を担当した舞台だったようです。

■スライド19

「円形劇場形式による創作劇の夕」1955年12月5日／産経国際会議場

同じ55年に行われた「円形劇場形式による創作劇のタベ」です。演出家である武智鉄二と組んで行われた公演です。「月に憑かれたピエロ」と「綾の鼓」の2作品が上映され、「月に憑かれたピエロ」では、詩の翻訳を秋山、舞台装置と仮面は北代、衣装は福島、照明を今井が手掛けた仮面劇となります。能や狂言師の参加がありまして観世寿夫（かんぜひさお）、野村万作らが出演しています。

「バレエ実験劇場」とならんで、「実験工房」にとっては非常に重要な舞台でのコラボレーション作品となります。

■スライド20

映画「モビールとヴィトリヌ」1954年、新理研映画製作

映画「銀輪」1956年、新理研映画製作

こちらの写真は映画『銀輪』の制作風景を撮られたものです。「実験工房」では、2本の映画が作られています。最初の「モビールとヴィトリヌ」という作品は1954年9月に試作が完成し、翌年の国立近代美術館の「抽象映画特集」で上映されましたが、現在フィルムのあるのは分かっておりません。

1956年に制作された「銀輪」は、日本自動車工業会のPR映画として制作されたもので、新理研映画に在籍していた松本俊夫が監督をしまして、特撮は「ゴジラ」を撮った円谷英二が担当していました。海外輸出向けに再編集されたフィルムが2005年に発見され、数少ない実験工房の映像資料として現在も見ることができます。ただ音楽は当時のものとだいぶ変わっているようです。

以上のように、駆け足ですが実験工房の活動、舞台、コンサート、映画といった多岐にわたる活動が行われたのち、1957年にグループ単位での活動は停止することになります。しかし、解散宣言などは出されず、その後もメンバー同士の交流というのは活発にありまして1960年代には草月アートセンター、1970年には日本万国博覧会でも一緒に作業するような例がたくさん見られています。

■スライド21

2 制作者懇談会

それでは、次に「制作者懇談会」の活動を追って見ていきたいと思います。結成されたのは、実験工房より少し時代が後になり、1955年です。中心的なメンバーは、美術の池田龍雄、映画の熊谷光之（のちに粕三平と名乗るようになります）、そして演劇の田畑慶吉の三人です。「実験工房」と同じように、メンバーの構成を見ても、美術だけではなく、映画や演劇、文学といった多様なジャンルの人々が集った研究会であることがわかります。結成当時は全員20代の若いグループでした。

■スライド22

結成の経緯を見ていきたいのですが、まず画家の池田龍雄は、佐賀県出身、特攻隊員として終戦を迎え、その経歴のために師範学校を退学となり、画家を志して上京をすることになります。1948年に多摩美に入学し、「アヴァンギャルド芸術研究会」など前衛芸術運動に参加し、ルポルターージュ絵画などを発表、社会的な問題を扱う「ペン画」などでよく知られている作家です。

1954年8月に池田龍雄は初めての個展を、銀座の養精堂画廊で行い、その個展をきっかけに非常に親しくなったのが、熊谷光之でした。熊谷は、九州大学造船科を中退し、考古学から美術史、映画まで関心領域が広く、のちには短編映画の制作やチェコアニメを輸入、紹介する仕事を積極的に行った人物です。

結成のきっかけは、池田と熊谷が、1955年3月に安部公房の演劇「制服」（飛行館／新橋）を見た後に、喫茶店で話していて熊谷が総合的な研究会をしようと提案をしたということです。「美術や映画や演劇など、互いに近いけれど異なるジャンルの者たちが集まって、研究活動だけでなく何か総合的な制作の実を

あげようとの趣旨」で結成されます。まず熊谷の友人である田畑慶吉に声をかけて三人で何度か準備会を行った後、それぞれが各自の友人に参加を呼びかけ、1955年4月に「制作者懇談会」が結成されます。写っている写真は、絵画部が新潟で展覧会をしたときに撮られたものですが、熊谷、田畑、池田が写っているんですが、このグループは集合写真というものはいずれも残っておりません。これくらいしか資料が出てこないということになります。

■スライド23

こちらは制作者懇談会が出していた機関紙『リアリズム』になります。ガリ版刷りではありますが、よく見ると文字の色が各号で変えられていたり、手作業で図版がつけられたりと、わりに凝った印刷物となっています。1号の冒頭に池田龍雄が「現実認識の諸問題」という論考を寄稿していますが、『リアリズム』全体を見渡してみますと「ドキュメンタリーと記録性、現実認識と表現の関係、虚構と現実との問題」といった花田清輝がこのころ唱えていた「新しい今日的リアリズム」を模索する論考が多いという印象があります。

■スライド24

事務局として機関紙の発行にあたったのは、主に熊谷と田畑であり、2号には研究会である「例会」のスケジュールや規約なども掲載されています。「制作者懇談会」発足当初の例会の頻度はかなり高く、活発な活動の様子がうかがえるかと思えます。機関紙だけではなく、例会の報告集や資料なども作成されており、これは熊谷のまめな性格による手柄であると池田は回想しています。

■スライド25

このグループも結成時の宣言はありませんが、活動範囲や方向性は「リアリズム」の編集後記や規約に示されています。

「絵画・映画・演劇など各ジャンルで働いている若い実作者たちが集って」結成されたということ、「会の目的は実作の為に各自がリアリズムの方法を身につけること」とされています。また会員は例会での報告が義務付けられていることから、研究会に重きをおいていることもわかります。実際の活動を見ますと、絵画、映画、演劇という各部会の総合をしたものというのはいまだ実現できておらず、それぞれの活動ということになります。

■スライド26

こちらは絵画部の行った展覧会のスケジュールなのですが、東京への文化の一極集中を批判して、展覧会を地方で開催するとの申し合わせを行っています。1955年11月の福岡県小倉を皮切りに、大分市、新潟県新発田市、福島県小名浜市、大阪市、富山市と日本各地で展覧会を6回開催していますが、東京では一度も展覧会はしていません。

■スライド27

展示の会場は公民館や図書館といった場所が多く、現地に行くのは数人で、ごく小さい作品を持ち込んで開催したということです。地元のグループとの交流も行われ、大阪では制作者集団「極」との合同展、富山では新鋭作家展という形で地元の作家と合同の展覧会を行っています。

制作者集団「極」の久保晃の回想によれば、久保が「東京の村松画廊で個展をしたときに「制作者懇談会」の何人かと仲良くなり、彼らに関西で展覧会をしたいということで、久保が会場を借りてに阪急まで行った」と回想しています。河原温、芥川紗織、池田が大阪に来て、久保晃が宿泊の手配もしたとのことです。

■スライド28

演劇部の活動としては、「集団劇場」というものがあります。そんなに公演の回数は多くないのですが、最初の「けつまづいてもころんでも」という芝居では、舞台装置は河原温と石井茂雄が担当しています。翌年の公演は池田龍雄が手掛けています。

集団劇場の後に「人間座」という劇団、集団劇場に関わっていた江田和雄という人物が立ち上げるんですけど、そこで河原温が舞台美術を担当して非常に評判となります。また河原がメキシコへ渡ったのちは長らく池田龍雄が舞台美術を行うことにつながっていきます。

■スライド29

映画部会の活動としては、研究会では非常に活発に各メンバーが発表したりしているんですけども、具体的な活動としては、1957年6月から刊行された『映画批評』があります。創刊号の編集・発行人は「制作者懇談会映画部会」となっていますが、実質的には熊谷光之（粕三平）が私財を投じて発行を重ね、1959年1月で終刊しています。執筆には花田清輝や関根弘、大島渚、吉田喜重、松本俊夫など多彩な顔ぶれが揃っておりまして、当時は他に類のない映画評論誌として非常に貴重な存在だったようです。

「制作者懇談会」全体としての活動は1957年に収束しますが、研究会での当初目標とされた映画製作については、かなり後になります。1967年に一部の有志のメンバーによって、粕三平の映画「怨霊伝」として制作もされています。

■スライド30

3 まとめ

「実験工房」と「制作者懇談会」の活動、ごく簡単ですが概要をたどってみました。

それぞれの活動を簡単に書き出してみたのですが、「実験工房」の方が、造形・音楽・舞台といったジャンルを横断する活動として先駆的であり、新しい技術や機材に積極的に取り組んだこと、音楽や造形のいずれでも、海外の新しい動向を取り入れ、紹介を行ったということがあげられるかと思います。

「制作者懇談会」の方では、絵画、映画、演劇のメンバーが、共通認識として「新しいリアリズム」を模索したこと、ジャンルの交流や総合をめざした研究会を行ったこと、地方展、「集団劇場」の公演、『映画批評』などの成果があり、会の活動のその後にそれぞれのメンバーの活動・交流が広がっていく、そういう役割を大きくはたしたと言えると思います。

グループのカラーも表現の方向性も全く異なりますが、この二つのグループは、美術の枠をこえたジャンルの越境という点では共通しているかなというふうに思います。

■スライド31

この二つのグループの周辺となる、1950年代の東京の前衛美術グループを簡単に図にしてみました。

「実験工房」と「制作者懇談会」で、それぞれ造型のメンバーとして中心的な役割をになった作家たち、「実験工房」では北代、山口、福島、「制作者懇談会」では池田ですが、彼らは1948年後半から1950年にかけて「アヴァンギャルド芸術研究会」、「世紀」、「プボワール」というグループで共に活動していた仲間です。

彼らは、まず岡本太郎と花田清輝を中心に行われていた「アヴァンギャルド芸術研究会」に参加し、同会と合流した「世紀」では絵画部で活動を行い、その絵画部の多くが脱会して結成した「プボワール」において一緒に活動しますが、1950年の朝鮮戦争勃発をきっかけに、政治的関心が強い池田のグループと、純粋芸術よりの北代、山口のグループは方向性の違いから分裂し解散。池田はその後「NON」や「エナージ」

というグループを経て「制作者懇談会」結成し、北代たちは1951年には実験工房を発足するという流れになります。

■スライド32

北代、山口、福島、そして池田が参加した「アヴァンギャルド芸術研究会」は、1948年1月に、岡本太郎と評論家・花田清輝がはじめた「夜の会」から派生した活動です。

「夜の会」は、岡本と花田が中心となった東京の前衛芸術運動ですが、結成のきっかけは、花田清輝の『錯乱の論理』を読んだ岡本が強く共感し、それを耳にした花田が、岡本の自宅を訪ね、そして、共に敗戦後、焼け野原となった東京での芸術運動の必要性を強く認識するところからはじまります。

同人のなかでは、画家は岡本太郎ただ一人であり、それ以外は、すべて評論家と文学者のメンバーでした。主な活動は、レストラン・モナミというところで行われたサロン風の公開討論会で、『新しい芸術の探求』という本には討論の記録が収録されています。岡本の「対極主義」、安倍公房の「創造のモメント」、埴谷雄高「反時代精神」、花田清輝「リアリズム序説」などですが、それぞれの発表とそれに基づく討議です。

しかし文学的な議論だけは飽き足らず、より具体的な制作の実践を求めた岡本と花田がはじめたのが「アヴァンギャルド芸術研究会」で、若手作家たちが作品を持ちより、合評が行われました。そこに北代たちが参加をしていくということになります。

■スライド33

『新しい芸術の探求』の扉に収録された花田の序言なんですけれども、ここで赤字になっているところですが、共同研究そして共同制作を今後行っていくという意思を確認することができます。

革命的芸術は、前衛芸術家相互の無慈悲な対立と闘争とによって推進される、猛烈な芸術革命運動のなかから生まれる。(中略)

われわれは、すべてを破壊し、すべてを創造しなければならないのだ。われわれ相互のあいだの討論が白熱化し、われわれの自己批判が峻烈をきわめるゆえんである。まずわれわれは共同研究から出発する。近き将来において、われわれの研究は共同制作にまで発展するだろう。(夜の会編『新しい芸術の探求』月曜書房、1949年)

ここですでに、1950年代から60年代にかけて、花田が岡本とともに提唱していく「ジャンルを超えた総合的芸術運動」につながるビジョンが示されています。

■スライド34

この『新しい芸術の探求』が刊行された1949年に、「アヴァンギャルド芸術研究会」は「世紀」と合流するんですけども、「合流」を伝える『世紀ニュース』第一号を見ますと、事業計画として「ジャンル交流」ということがうたわれています。「種々のジャンルの組み合わせ交流を計画」ですとか、詩人と作曲家との懇談なども報告されています。しかし、実際の活動としては文学の傾向が強く、北代ら絵画部のメンバーというのは一年後に一斉に脱退するという形になります。

のちに池田龍雄は、「ジャンルの垣根を越えようと主張した、かつての〈夜の会〉—〈世紀の会〉の思想を受けついでいたせい、わたしは他のジャンルの人たちとの付き合いになんこのこだわりも持たないばかりか、むしろ積極的に過ぎて、自分のホームベースがおろそかになるのではないか、という反省をしなければならぬ程だった。」と回想していますが、「夜の会」を源流とする、芸術の革命とジャンルの総合

という旗印が、その後に「実験工房」や「制作者懇談会」に受けつがれていったということも、1950年代の東京の芸術運動のひとつの形、流れと見ることもできるかもしれません。

すみません、だいぶ時間が押してしまいましたので、これで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。